

一・はじめに

日本語文は主成分となる主語・述語が文の生成要素となる以外に修飾機能の生成的性質が主要成分と関わり文構造を決定する要因にもなるため、日本語の修飾構造についての研究が多くなされてきた。しかし日本語の修飾構造の史的変遷について触れたものは散見されるほどであり、また、変遷してきた日本語が現在いかなる修飾機能の型を多く有する言語であるのか言及したものは見られない。

本研究は修飾構造の史的変遷を明らかにすることを目的とし、現代日本語文の修飾構造がいつ、どのように成立したのかという観点から考察する研究である。本稿ではその一端として、中古・中世と現代を対照させ¹、形容詞において実証的に連体連用修飾機能の違いを史的に明らかにしたいと考える。

二・近年の修飾研究の動向

修飾機能についての先行研究には以下のものがある。修飾機能についての研究は現代語研究において盛んであり、史的研究としては、動詞における修飾については多いものの、形容詞修飾については多くない。

まず、現代語の共時的研究として井本亮（2005）では、意味的修飾の基本原理を基盤に据え、副詞的修飾の関係構造を捉えている。関係構成のあり方を重視した副詞的修飾関係の考察が、被修飾成分である述語動詞句の意味的性質を探ることにつながる可能性を指摘し、近年議論されている語彙意味論や概念意味論の動詞句の意味構造や文の事象構造を明らかにする記述装置と絡めながら動詞述語文の意味的研究に多くの知見を提供するものであることを指摘する。

また、奥津敬一郎（1996a）においては、機能動詞文において連体と連用

¹本稿では現代日本語との対照という立場から中古・中世の代表的作品を選んだ。中古・中世と現代を対照させるということと紙幅の関係で、本稿では近世および近代の資料や中古・中世のその他の資料について言及することができなかったが、今後の課題としては各時代の資料数を増やし、詳細に検討する必要がある。

が「激しい練習をする：激しく練習をする」ように対応することを指摘し、機能動詞文の一種である自然現象文について言及する。自然現象文については現代日本語だけでなく古代日本語についても論及し、「苦しくも降り来る雨か神の崎狭野の渡りに家もあらなくに（万葉集 265）」の「苦しくも」が文副詞であり、「苦しき雨の降り来るか」とでもすれば、連用と連体が対応することを指摘し、現代語で言えば「あいにくの雨が降ってきた」と「あいにく雨が降ってきた」となるが、ここでの「雨」は単なる名詞ではなく「雨降り」という現象を表す動名詞であり、述語も「降る」という機能動詞であることから、文副詞も連体ができるという。しかし、常に連体が連用と対応するわけではなく、動名詞が主語で、機能動詞が述語であるような自然現象文でないといふ連体と連用の対応が成立しないと述べる。

同じく奥津敬一郎（1996b）では、例えば「a.ズボンに大きい穴があいた。」と「b.ズボンに穴が大きくあいた。」とでは「穴」は「あく」という動きの結果」として連帯と連用が対応するが、「a.大きいズボンに穴があいた。」と「b.*ズボンに大きく穴があいた。」とではb自体は非文ではないが、aとの対応という意味では非文であることを指摘し、このように変化動詞文において〈結果〉を表す名詞が主語または目的語である場合、その名詞について連体と連用は対応すると結論付ける。

また、連体修飾を主とした研究では特に節の時制について論及するものが目に付く。例えば北村雅則（2001）や岩崎卓（1998）である。さらに、松本正恵（2002）のように修飾構造に着目し、動詞述語文の意味的研究につなげるものもある。他には安藤まや・関根聡（2005）という計量的論考もある。外国語との比較研究の観点からは高烈夫（1999）や小林 立（1997）など多く見られる。

史的研究としては少ないながらも鍵本有理（1999）があり、万葉集に見られる上代語と現代語を比較するものが見られた。個別的な語における形容詞研究としては、吉田光浩（1998）（2003）や村田榮穂子（2002）などの論考がみられた。吉田（1998）（2003）は語の出自や用法について検討し、類義語の発生と消滅について史的変遷を明らかにしており、村田（2002）は古代

語の形容詞における造語形式について中古の散文を資料としてその造語形式を分けている。このような形容詞の語史的論考は数多く存在する。しかしながら形容詞の連体・連用修飾機能について論じたものは管見では散見されるのみである。形容詞の連体修飾については林浩恵（2006）が、連用修飾については重見 一行（1990）がみられ、前者は上代語の形容詞語幹と連体形による修飾についてその違いを述べ、後者は中古における連用修飾の表現の諸相について述べる。しかしこれらは共時的な形容詞の修飾機能を論じており、現代語との対照や史の変遷を目的としたわけではなく、本稿の目指すところと異なっている。

これらを踏まえると現代語の研究には、修飾成分として連体と連用について対応させ、あるいは外国語との比較を通して検証を行い、また連体節の時制や語順から文構造についてアプローチするものなどがあることが分かる。古代語関係では語の出自などの語史や派生の形式分類などについて述べ、あるいは異なる修飾間における表現の違いについて言及する共時的研究があることが分かる。但し形容詞の修飾については散見できたものの、依然として少ない感は否めない。

そういった意味ではこれらを通じてほとんど未開拓である余地が存在することが分かる。それは現代日本語文の修飾構造はいつ、どのように成立したのかという観点から考察する研究である。修飾機能は、先に述べたごとく、文の主要成分である主語述語以外でありながら、文構造を決定する際に大きく働く要因のひとつであるため、そういった意味で文体論とも関わる問題になる。日本語史の観点からは、日本の和文と韻文とが中国大陆から渡来した仏典や漢籍と大きく関わり合いながら日本語の文章が作られたといわれている²。そこで、修飾構造を研究の観点の機軸に据えることは日本語文の修飾構造の発達過程を実証的に明らかにできる方法ではないかと考えられる。

² 和文体と漢文系文体との和漢混淆については、古くは金田一京助著 1952『国語の変遷』創元社等の書籍で述べられ、近年においても田中雅和 1987「和漢混淆文の和文語の受容についての一考察」『鎌倉時代語研究 11』武蔵野書院収など多数の論考がある。さらに現在では、佐藤武義著 1995『概説 日本語の歴史』朝倉書店をはじめとして各概説書に記載されており、定説となっている。

また、先の井本（2005）でも指摘があったように、関係構成のあり方を重視した修飾関係の考察が、被修飾成分である述語動詞句の意味的性質を探ることにつながる可能性があり、修飾構造の史的変遷を明らかにすることは現代日本語文の動詞述語文の意味研究にもフィードバックされる多くの知見を提供するものであると考えられる。

予想される結論としては、古代日本語の和文体では連体修飾成分が多く、時代が下るにつれ、連用修飾成分が多くなっていくのではないかとということである。中古の和文では、文末がなかなか現れないという現象がある。これは二つ以上の文を一文に連結する機能を文構文で持たなくてはならないことを意味する。すなわちその機能を有するものが連体修飾であったと考えられる。一方、連用修飾は動詞述語にかかってゆくため、文末があらわれないこと（＝動詞述語の非明示）は連用修飾の使用が避けられることにつながる。また、文末があらわれないのは、中古の和文は接続として現代日本語文よりも長い節をつくり、文と文を連結し、重文・複文とするということもある。こういったことを踏まえ、修飾機能という観点からみれば、中古の和文では連体修飾が多く使用されると考えられる。

中古から中世になると和漢混淆文³という文体が現れ、格関係を表示するようになり、より論理的な文体へと変化してゆく。文中において格関係を明示することは文を二文以上に分けることになり、文が和文よりも短くなる。このことによつて連体修飾が解消され、述語を中心に文を構成するように変化するようになる。この機能を連用修飾が担っていたのではないかと考えられる。しかしそれがいつから始まったことなのか、実証的に研究する必要がある。これは、現代日本語がどのような修飾構造を持つのかだけでなく、動詞述語文の発達過程を明らかにし、修飾構造を見ることによつて現代日本語の動詞述語文や文の事象構造を明らかにすることを可能ならしめるものである。その一端として現代日本語との対照という立場から、まず中古と中世について調査し、比較対照したいと考える。

³ 注2参照。

三・調査対象と資料

本稿では形容詞修飾における変遷の一端を明らかにするために古代語と現代を対照させたい。形容詞は連体修飾を行うが、日本語には連用修飾もある。この点について史的変遷をみたいと考える。対象とする形容詞については、現代日本語との比較に焦点を置きたいので、現代日本語においてごく基本的な形容詞について考えてみたい⁴。具体的には「大きい・小さい・長い・短い・深い・浅い・遠い・近い・重い・軽い・古い・新しい・強い・弱い・多い・少ない・若い・幼い・嬉しい・高い」の20種である。これらの連体修飾と連用修飾における修飾機能の変化の動向をつかむため、中古中世と現代を対照させたいと考える。

資料としては、まず中古の和文の代表である『源氏物語』と中世の軍記物の代表である『平家物語』⁵中の連体・連用修飾をなすものについて用例を取る。『源氏物語』は、言うまでもなく中古文学の中心をなす物語であり、中古和文の完成をみたとされる資料である。また軍記物語である『平家物語』は漢籍の影響を色濃く受け、鎌倉時代の和漢混淆文体を特徴とする資料である。以上と比較する現代日本語の資料は、宮本輝の小説作品⁶とする。現代小説において特異といわれる文体ではなく、より普遍的普及的文章として比較に適していると思われる。

但し、用例採取の際にひとつ問題点がある。和文には文末形式がどこかはっきりしないという懸念である。しかし、修飾される名詞（連体修飾）と修

⁴ 調査対象については、三時代を通して意味変化が少なく、国立国語研究所『分類語彙表』の基本語彙項目に掲げられているものに限った。

⁵ 『平家物語』については読み本系、語り本系など多数存在するためテキストの選定として適切であるか懸念されるかもしれないが、本稿で使用した古典文学大系平家物語の底本『覚一本 平家物語』は研究によって校訂され、中世の傍系の物語ものと異なり、流布しているもので最も信頼性が高いとされるのでこれを採用した。

⁶ 宮本輝は兵庫県出身。作品は村上龍や村上春樹のように文体について批評されることは少ない。むしろ論じられるのは「美しい日本語」（仁瓶浩明（2004）「研究動向 宮本輝」『昭和文学研究』48）であることから、現代小説において特異といわれる文体ではなく、より普遍的、普及的文章として比較に適していると判断される。

飾される動詞（連用修飾）を指標にすることを遵守し、文末形式によらず、この二つの指標をあくまでも軸にするという方法である。ここで本稿における用語について確認しておきたい。本稿で使用する「連用修飾」という言葉は学校文法における「連用修飾」とは一致しない。本稿の連用修飾とは、北原保雄（1981）⁷における連用修飾機能に相当し、いわゆる格成分は対象に含まれないこととする。構文論的には、形容詞が終止形述語、係り結びによる連体形述語や連用中止法に用いられている場合は検討の対象にしない。具体的にいうと「この花は美しい。」（終止形述語）や「名もなく、金もない。」（連用中止法）などは含まず、連用修飾は「静かに読む」や「高く昇ってゆく」などを認める。連用修飾成分は「統括機能と関係しないもの」（北原 p.211）として考え、「彼が本を彼女に渡す」といった場合の「本を」や「彼女に」などは連用修飾成分とは認めない。つまり「仕事を早く片付ける」といった場合、「早く」は連用修飾成分と認めるが「仕事を」は連用修飾成分とは認めないということである。

また連体修飾は「美しい花」や「この木が大きいのは、大切に育てからだ。」などのような体言相当を修飾するものについて認めることとする。つまり、本稿における「修飾」は用言連体形、連用形によって形成される、修飾対象を意味的に限定する言語行為を指す。文の構成要素としての主語、述語について意味を限定しようとするとき、連用修飾を多用するのか、連体修飾を多用するのか、その観点から日本語における修飾構造の変容の一端を、対照を通して明らかにすることを目的としている。英語は文の意味構成において名詞（体言）の果たす役割が大きく、日本語は述語となる動詞および用言の果

7 北原（1981）では以下のように修飾機能を説明する。

修飾機能は、修飾成分の具有する関係構成の職能であり、被修飾成分の具有する概念を修飾限定する職能である。修飾機能は、修飾成分の具有する概念（修飾内容）と被修飾成分の浮遊する概念（修飾対象）との間にみとめられるところの所属＝非所属・状態＝動作・程度＝状態・程度＝動作などのいわば超論理的非論理的な関係概念に託されるものである。修飾成分は、被修飾成分の具有する概念を修飾限定するものであって、統括成分を修飾する場合においても、その具有する統括機能とは関係しない。（p. 178）

本稿ではこれを援用することとする。

たす役割が大きいと言われている。前者では連体修飾を後者では連用修飾を多用することになる。これを日英語の言語タイプの相違とするならば、日本語の歴史的変遷の中でこれに類似するような変化があったのか、なかったのかということを実証的に解明することは極めて意義深いことである。その時、連用・連体と格助詞「が」「に」「を」「へ」などによって表示される格成分とは関係性が高い。しかし、連体形・連用形によって体言・用言を意味的に限定することを目的とする修飾成分と格成分とを比較すると両者は本質的に異なっている。修飾成分が修飾する対象に意味的に内包される存在であるのに対し、格成分は対象に要求され、外側から文の構成を担う存在であるからである。

これらを踏まえ本稿ではごく基本的な形容詞に絞って考え、修飾構造における変化の動向をつかむため、上記の資料をもとに中古・中世と現代を対照させてゆくことにしたい。そして、得られた用例を文の修飾構造成分ごとに分類してカテゴリー化し、各資料における修飾構造の特徴の違いを計量的記述的に述べ、実証的に明らかにする。

四・中古中世の形容詞の修飾機能

(一) 中古

ここでは、平安時代を代表する源氏物語を資料に⁸、連体修飾と連用修飾について述べたい。ここでも前述した現代語に相当する古代語について絞って考えたい。これらの語彙は現代語においても使用され、かつ意味変化が少なく、修飾構造の変遷を指示するものとして適していると思われる⁹。

大きなり¹⁰ (大し¹¹)・小さし・長し・短し・深し・浅し・遠し・近し・

⁸ テキストは『源氏物語一〜五』(日本古典文学大系 14 巻〜18 巻) 岩波書店とし、用例には、大系の巻数、及びページ数、行数を添えた。用例の検索には「国文学研究資料館 古典文学本文データベース」http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi を使用した。

⁹ 中古において選定した形容詞にク活用が多いという指摘があったが、現代日本語の基本語彙項目として『分類語彙表』に挙げられている、つまり現代まで生き残った基本的な形容詞にク活用が多かったということであり、本稿の目的とするのは活用形の変遷ではなく、修飾構造の変遷であるため、その指摘は当たらない。

¹⁰ 現代日本語の「大きい」は、辞書類(『日本国語大辞典』小学館・『増補版 岩波古語大辞

重し・軽し・古し・新し・強し・弱し・多し・少なし・若し・幼し・嬉し・高し

これらの『源氏物語』中における修飾構造について調査し、まとめたものが表1である。表1を見られたい。縦軸に語彙を配置し、さらに連体修飾側に『源氏物語』各巻の総文字数¹²を設けた。また、横軸には各巻における連体修飾および連用修飾の総数を配列した。横軸の合計1と合計2はそれぞれ連体修飾と連用修飾における総数を示し、率1と率2は連体修飾と連用修飾それぞれの全体（1887）に対する割合を示す。

表1 『源氏物語』修飾成分

連体	源氏一	源氏二	源氏三	源氏四	源氏五	合計1	率1(%)	連用	源氏一	源氏二	源氏三	源氏四	源氏五	合計2	率2(%)	全体合計	全体率(%)
文字数	266378	282956	271629	312058	316022											1049043	
大きなり(大し)	3	6	10	3	6	28	15	大きなり(大し)	1	1	1	1	1	5	3	33	18
小し	9	5	8	4	7	33	18	小し	3	1	2	3	3	12	6	45	24
長し	13	5	8	15	4	45	24	長し	14	9	4	3	0	30	16	75	40
短し	1	0	1	0	3	5	3	短し	2	1	0	3	0	6	3	11	6
深し	25	34	62	55	27	203	108	深し	48	43	29	64	50	234	125	437	233
浅し	0	0	4	1	1	6	3	浅し	1	2	3	0	1	7	4	13	7
遠し	5	7	2	6	6	26	14	遠し	4	10	2	11	10	37	20	63	34
近し	16	36	16	32	33	133	71	近し	44	34	40	53	49	220	118	353	189
重し	5	5	6	3	7	26	14	重し	6	7	6	10	5	34	18	60	32
かろし	1	2	2	0	0	5	3	かろし	0	1	2	0	1	4	2	9	5
古し	5	11	8	6	2	32	17	古し	0	0	0	0	1	1	1	33	18
新し	3	3	1	4	4	15	8	新し	2	2	0	10	9	23	12	38	20
強し	4	3	0	3	1	11	6	強し	9	6	2	15	2	34	18	45	24
弱し	2	1	2	3	3	11	6	弱し	6	1	3	8	1	19	10	30	16
多し	3	6	1	0	0	10	5	多し	31	24	28	41	25	149	80	159	85
少なし	0	3	4	3	2	12	6	少なし	1	1	4	3	1	10	5	22	12
わか	30	30	25	37	38	160	85	わか	15	4	8	12	8	47	25	207	111
おさな	15	2	2	2	7	28	15	おさな	3	1	2	0	0	6	3	34	18
われ	7	15	5	10	13	50	27	われ	13	12	11	10	29	75	40	125	67
高し	6	15	19	12	10	62	33	高し	2	8	8	4	11	33	18	95	51
合計	153	189	186	199	174	901	477	合計	205	168	155	251	207	986	523	1887	1008

さらに、全体合計は連体修飾と連用修飾を足した合計を示し、全体率は全体の合計（1887）に対する、各語彙の連体修飾・連用修飾の合計（全体合計）の割合を示す。まず、連体修飾成分（合計1の合計）は901あり、連用修飾成分（合計2の合計）は986あり、全体の1887での割合は、それぞれ連体修飾477%、連用修飾523%とやや連用修飾が多いが、割合としては大体拮

典』岩波書店など）に中古では形態の違いによって「多し」と「大し」の意味を分けていたとする。「大し」は、ナリ系において「大きい」の意味を表し、現代日本語では「大きな」という連体詞として残っているため、中古と中世では例外的に「大し」を意味する「大きなり」を「大し」の代替とした。

¹¹ 「大きなり」がナリ活用形容動詞なのか、「大き+なり」（「大し」の連体形+助動詞ナリ）なのか、それは様々な議論（注13参照）があり、現在の段階では確定されていない。しかしながら修飾成分の対照を通じて、「大きなり」「大し」と「大きな」「大きい」の間を繋ぐ手掛かりとなる可能性があるため、本稿ではこの形式を採用した。

¹² 表1および2で示した文字数は「国文学研究資料館 古典文学本文データベース」
http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi の項目「総文字数」に依っている。

抗している。

また、全体率をみると、全体の延べ数 1887 に対してもっとも連体修飾の頻度が高いのは深し 108% であり、若し 85、近し 71、高し 33、嬉し 27、長し 24、小さし 18、大きなり（大し）18、おさなし 15、遠し 14、重し 14 と続く。

「大きい」を意味する「大きなり」は、一見ナリ活用形容動詞の形態をしているため和文脈では数が少ないように思われるかもしれないが、連体修飾成分におけるこの割合からすれば、他の形容詞と比べて決して少なくはない。むしろ連体修飾では比較的多く使用されたといえる。そういった意味では「大きなり」が「大しの連体形＋助動詞なり」の構成であるとの議論がある¹³ことは、使用状況を鑑みると矛盾が少ないので頷ける。「大きなり」は和文脈系統でも使用されており、他の漢文訓読系語彙とは別種のものである感が否めない。

さらに古代語の「おほし」は「多し」と「大し」が同音異義語であるため、辞書類には形態によってその意味を区別していたと言われている¹⁴が、表 1 の連体修飾成分と連用修飾成分で「大きなり（大し）」は連体修飾のほうが多く、連用修飾成分は 5 例のみである。また「多し」は連用修飾成分として 149 例使用され、連体修飾成分では 10 例であまり使用されない。つまり連体・連用修飾成分として相補分布を示す。また、「多し」と「大し」を使用するときの活用形が固定的で、例えば「多し」は『源氏物語』で「多き」という形（連体形）がなく、「大し」は「大きに」「大きなる」などを使用し、「大く」や「大う」（連用形）がない。使用される語形が固定的だということは、連体・連用修飾を担う役割が分かれていたために形態が異なっていたともいえる。

例 「いとよう似給へり」と、内侍のすけの聞こえるを、わかき御心地に、

¹³ 山内洋一郎（1999）坪井美紀（1999）など「オホ」を語幹とした語の派生関係を明らかにする論考はあるが、いまだ確定されていない。さらに、松下文法、時枝文法、現在では言語学研究会などでは形容動詞を独立した品詞として認めない立場も存在する。

¹⁴ 小学館『日本国語大辞典』や岩波書店『増補版 岩波古語大辞典』など

「いとあはれ」と思ひきこえ給ひて、(略)(源氏1・46・16)

例 「さればよ。あるやうあらん。」とて、近き御几帳のもとに入れたてまつりたり。(源氏一・333・3)

例 すこし立ちいでつゝ見渡し給へば、たかきところにて、こゝかしこ、僧坊ども、あらはに見おろさる。(源氏一・178・12)

連用修飾では、深し 12.5、近し 11.8、多し 8.0、嬉し 4.0、わかし 2.5、遠し 2.0、重し 1.8、強し 1.8、高し 1.8、長し 1.6、と続く。

例 「なに心ありて、海の底まで深う思ひ入(る)らん。底のみるめも、ものむつかしう」などの給ひて(略)(源氏一・182・14)

例 小君、近う臥したるを、起し給へば、うしろめたう思ひつゝ寝ければ、ふと驚きぬ。(源氏一・117・9)

例 「そこにこそ、多く集へ給ふらめ。すこし見ばや。さてなん、この厨子も心よく開くべし。」(源氏一・57・12)

(二) 中世

ここでは、中世を代表する『平家物語』¹⁵を資料に、連体修飾と連用修飾について述べたい。『源氏物語』と同じく、前述した語彙について述べることにする。

『平家物語』の修飾構造について調査し、まとめたものが表2である。表2を見られたい。縦軸に語彙を配置し、さらに『平家物語』の総文字数を設けた。また、横軸には連体修飾および連用修飾の総数を配列した。横軸の合計3と合計4はそれぞれ連体修飾と連用修飾の総数を示し、率3と率4は連体修飾と連用修飾それぞれの全体(410)に対する割合を示す。さらに、全体合計は連体修飾と連用修飾を足した合計を示し、全体率は全体の合計(410)に対する、各語彙の連体修飾・連用修飾の合計(全体合計)の割合を示す。

全体の修飾成分中 連体修飾成分は 317% 連用修飾成分は 683% である。

¹⁵ 平家物語のテキストは『平家物語』(日本古典文学大系 岩波書店)とし、用例には巻数、及びページ数、行数を添えた。注5も参照されたい。

中古の割合が拮抗していたのに対して、中世では連用修飾成分の割合が増加している。使用頻度が高いものから示すと、連体修飾成分では、古し 46、大きなり¹⁶（大し）41、深し 39、長し 29、高し 29、重し 17、浅し 15、うれし 12 と続く。連用修飾成分では、大し（大きなり）163、多し 105、近し 102、深し 59、高し 39、長し 32、強し 32、重し 29、遠し 27、少なし 17、うれし 17、浅し 15、弱し 15、小さし 12 と続く。

連体修飾成分

例 資方卿はふるい人おとなにておはしき。(平家上・105・12) 脚注；古参の年長者

例 夜半ばかり俄に大風吹、大雨下り、雷おびたゝしうな^{はれ}って、天霽て後、雲井に大きなる声のしはがれたるをもつて、「(略)」と三声さけんでぞ通りける。(平家上・363・10)

例 やんごとなき修学者、知恵ふかき大衆達には、昇^かきさゝげられてのぼるべき。(平家上・71・11)

表2『平家物語』修飾成分の分布

	連体・合計3	率3(%)	連用・合計4	率4(%)	全体合計	全体率(%)
文字数					810492	
大きなり(大し)	17	41	67	163	84	205
小さし	0	0	5	12	5	12
長し	12	29	13	32	25	61
短し	1	2	1	2	2	5
深し	16	39	24	59	40	98
浅し	6	15	6	15	12	29
遠し	8	20	11	27	19	46
近し	10	24	42	102	52	127
重し	7	17	12	29	19	46
かろし	0	0	1	2	1	2
古し	19	46	1	2	20	49
新し	3	7	3	7	6	15
強し	2	5	13	32	15	37
弱し	1	2	6	15	7	17
多し	2	5	43	105	45	110
少なし	0	0	7	17	7	17
わかし	9	22	2	5	11	27
おさなし	0	0	0	0	0	0
うれし	5	12	7	17	12	29
高し	12	29	16	39	28	68
合計	130	317	280	683	410	1000

¹⁶ 注 10・11 参照。

連用修飾成分

例 大衆国分寺へまいり向ふ。前座主おほきにおどろひて、(略)(平家上・70・15)

例 侍共おほくほろびにけり。(平家下・20・2)

例 進藤左衛門尉高直、ちかう召して、「(略)」と仰せければ、(略)(平家下・42・14)

例 夜はすでにほのぼのとあけゆけど、河霧ふかく立ちこめて、馬の毛も鎧の毛もさだかならず。(平家下・122・4)

(三) 中古中世における修飾構造の動向

本節では文の修飾成分ごとに分類してカテゴリー化し、各資料における修飾成分の分布状況から特徴と違いを述べ、中古と中世の動向をみたい。『源氏物語』と『平家物語』の修飾状況をみるために表3を見られたい。

表3の縦軸には各時代の資料を、横軸には連体修飾成分総数と連用修飾成分総数を配置し、各総数に対する割合を連体修飾成分、連用修飾成分でそれぞれ算出したものが率5と6である。

表3 修飾機能(中古と中世)

	連体総数	率5 (%)	連用総数	率6 (%)	総計
源氏物語	901	477	986	523	1887
平家物語	130	317	280	683	410

まず注目されるのは、連体修飾成分と連用修飾成分の使用率において『源氏物語』においては連体修飾成分と連用修飾成分が477%対523%でやや連用修飾が多いが、大体拮抗しており、『平家物語』では連体修飾成分と連用修飾成分が317%対683%と、連用修飾成分のほうがやや多くなっている。

個別的には(下記表1・2抜粋)連体修飾成分と連用修飾成分において、前者が中古に多く、後者が中世に多いものは「大なり」「小なり」「長し」「短し」「高し」にみられた。

例 少しさし出て見いれ給へれば、大なる桂の木の追風に…(源氏物語一・418・2)

例 枝ども、おほく折れ伏したり。(源氏物語三・51・8)

『源氏物語』		『平家物語』	
	連体 連用		連体 連用
中古に連体修飾成分が多く、 中世に連用修飾成分の割合が多くなるもの	高し	62	33
	大きなり(大し)	18	5
	小さし	33	12
	長し	45	30
	少なし	12	10
中古から連用修飾成分が多く 中世でも多いもの	近し	133	220
	遠し	26	37
	重し	26	34
	強し	11	34
	弱し	11	19
	多し	10	149
	うれし	50	75
	深し	203	234
中古中世ともに連体修飾成分が多いもの	古し	32	1
	わかし	160	47
拮抗しているもの	短し	5	6
	浅し	6	7
	かろし	5	4
中古で連用修飾成分多く 中世で拮抗	新し	15	23
	おさなし	28	6
判定できない	おさなし	0	0

表 1・2 抜粋

「おほし」は中古・中世では「大し・多し」で表わされるが、「大きい」の意味では「大きなり」が使用される¹⁷。和文脈でも和歌でもみられ、修飾成分としては比較的使用されている。『源氏物語』では、連体修飾成分として認められた「大きなり」が18例確認できたが、連用修飾成分では5例見られた。『源氏物語』で「大きなり」は連用修飾成分としてはあまり使用されなかったが、連体修飾成分としては比較的用いられていたことになる。

中世の『平家物語』になると連用修飾成分のほうに「大きなり(大し)」が多く使われるようになる。一方「多し」のほうは、依然として連体修飾成分になるものが割合としてすくなく、連用修飾をする役割を担っている(表1・2 抜粋参照)。

例 大將おほきに感ぜられけり。(平家物語一 340・14)

例 哀はおほき習ぞかし。(平家物語一 270・14)

「小さし」も中古では連体修飾成分が多く、連用修飾成分が少ない。

¹⁷山内洋一郎(1999)では「おほ」(大・多)の変遷について言及し、語幹「おほ」を基とする語彙の派生関係について上代の資料をもとに述べる。

例 僧都の許なるちひさき童して（源氏物語一 198・4）

例 ちひさく引き結（び）て（源氏物語一 212・4）

「大なり」のような語幹を同じくするナリ系の語は中古中世で「小さし」には存在しなかった。しかしながら、中古中世での修飾成分の分布状況は「大なり」と同様で、中古では連用成分と比べて連体修飾成分が多く、中世では連体修飾よりも連用修飾成分が多い。（『平家物語』では連体修飾成分のみみられた。）ナリ系の形態を持たなくとも「大なり」と同様の動向を示すことを踏まえると、「小さし」「大なり（大し）」は連体か連用修飾かという役割分担が課せられていたと思われる。「大し」が「大なり」の形態を使用したのは、「多し」との同音衝突を避けるためであったのだろう。

例 さこそはちいさうもありけめ 薩摩潟よりはるばると都までつたはりけるこそ不思議なれ。（平家物語一 205・8）

その他、「長し」も同様に中古では連体修飾成分が多く、連用修飾成分が少ない。

例 「（略）ながき世の憂はしきふし」と、思ひ給へられしを、（源氏物語二 240・13）

例 ながく別れたてまつりぬ。（源氏物語二 198・7）

中世では「長し」の連体修飾成分と連用修飾成分の頻度が大体同じである。中古よりも連用修飾成分で使用する割合が多い。

例 命のながきかひもあらめ。（平家物語二 228・11）

例 諸天五妙のたのしみも此時ながくつき、（平家物語一 329・8）

例 ながく朽損の期あるべしとも、（平家物語二 384・6）

また、中古、中世ともに連用修飾成分が多いものは「近し」「遠し」「重し」「強し」「弱し」「多し」「うれし」「深し」にみられた。これらの語のほとんどは比較的使用頻度が高い。「うれし」は感情を表わす語であるが、その他の語は量的な事象を表わす語であることが注目される。動向の分布を表1・2抜粋でみた場合、延べ数で連用修飾成分が多くなるのであるが、中古の『源氏物語』と中世の『平家物語』をとおして連用修飾成分で使用する語の種類が多くある。

さらに、中古、中世ともに連体修飾成分として使用が多いものは「古し」「わかし」にみられた。これも中古、中世ともに連用修飾成分として多く使用する語と同じく、中古、中世ともに連体修飾成分として多く使用される。ただし連用修飾成分として多く使われる語と異なり、連体修飾成分として使われる回数が多いものは、中世の『平家物語』でも連用修飾成分として使われることが少ない。

その他に、連体修飾成分と連用修飾成分が中古の『源氏物語』と中世『平家物語』で拮抗している「短し」「浅し」「かろし」がある。これらは使用回数が両作品において少ない。さらに「新し」は中古で連用修飾成分が多く、中世で拮抗していた。

以上について中古の『源氏物語』と中世の『平家物語』を考察すると、中古では連体修飾成分が多いが中世になると連用修飾成分が多くなるもの及び連用修飾成分が元々多いものが20語中13語（「高し」「大きなり（大し）」「小さし」「長し」「少なし」／「近し」「遠し」「重し」「強し」「弱し」「多し」「うれし」「深し」）を占める。中古の『源氏物語』と中世の『平家物語』の両作品から、形容詞の修飾は連体・連用修飾でやや連用修飾が多いものの、割合が拮抗しているか連用修飾が多い。また、両作品で連用修飾成分が多い語彙は比較的使用回数が高く、量的な主観¹⁸を表わすものが多い。さらに中古の『源氏物語』で連体修飾成分が多く、中世の『平家物語』で連用修飾成分が多くなる語彙もそのようであった。

つまり両作品全体からみると古代語では連体修飾よりも連用修飾として形容詞が多く使われている。さらに、どの形容詞が連体修飾を多くし、連用修飾を多くするのかは、中古中世を通じて20語中10語（連体「古し」「若し」／連用「近し」「遠し」「重し」「強し」「弱し」「多し」「うれし」「深し」）

¹⁸形容詞の分類については様々論じられてきた。形容詞、形容動詞や「的」が後接するもの、しないものなど様々な観点があるが、細川英雄（1989）では、1)「わたしは～い」の形で「わたし」の心の様子を表すことが可能か 2)「わたしは～てたまらない／てならない」が可能か 3)対象内容としてモノ・コト・カラダのどれをとるか の三つの観点に基づいた分類案が示されている。こういった分類では形容詞は大別して量的なものと質的なものに対する主観の程度を表わす。

においてそれぞれ変化がないという結果になった。

五・現代の形容詞修飾成分

(一) 現代の形容詞修飾

ここでは現代小説として宮本輝の作品¹⁹を資料に、連体修飾と連用修飾について述べたい。現代語で調査対象としたのは以下の語である。

大きい・小さい・(大きな・小さな²⁰)・長い・短い・深い・浅い・遠い・近い・重い・軽い・古い・新しい・強い・弱い・多い・少ない・若い・幼い・嬉しい・高い

現代の修飾構造について調査し、まとめたものが表4である。表4を見られたい。縦軸に語彙を配置し、さらに連体修飾側に宮本輝の各作品の総文字数²¹を設けた。また、横軸には各作品の名称を配列した。その下には各作品における連体修飾および連用修飾の総数を配列した。横軸の合計5と合計6はそれぞれ連体修飾と連用修飾における総数を示し、率7と率8は連体修飾と連用修飾それぞれの全体(2559)に対する割合を示す。

さらに、全体合計は連体修飾と連用修飾を足した合計を示し、全体率は全体の合計(2559)に対する、各語彙の連体修飾・連用修飾の合計(全体合計)の割合を示す。まず、全体の修飾成分中、連体修飾成分は737%の割合を占め、連用修飾成分は263%の割合を占める。使用頻度が高いものから示すと、連体修飾成分では、大きな131%、小さな138、長い102、若い93、新しい44、強い33、深い33、近い32、高い27、古い24、遠い16、短い11、重い10、と続く。また、連用修飾成分では、大きい54、強い40、小さい34、軽い28、深い18、長い17、近い16、高い11、遠い10、と続く。

例 立ち停まって大きな身振りで話し込んでいる労働者風の男たちがい

19対象とした作品；宮本輝(1985)『錦繡』新潮文庫(1988)『ドナウの旅人上・下』新潮文庫(1989)『夢見通りの人々』新潮文庫(1994)『道頓堀川』新潮文庫(1994)『蛍川・泥の河』新潮文庫(1997)『朝の遊び上・下』講談社文庫(2000)『月光の東』中公文庫

²⁰ 注10・11参照。修飾成分を比較するために、現代日本語では「大きい」「小さい」の他に「大きな」「小さな」という連体詞についても項として設けた。

²¹ 表にある文字数は各本の本文のある頁数×行数×縦文字数により算出したもの。

た。(ドナウの旅人上 137・10)

例 「聞こえませんわ。そんな小さい声じゃあ。」

そんな場合、ひるまずに徹底的に言うべきことを言わなければならないと教えてくれたのはシギィであつた。(ドナウの旅人上 79・1)

例 それは水洗トイレの長い鎖の先についている取っ手だったのである。
(ドナウの旅人上 180・9)

例 良介は、母親の死が、息子を大きく歪めはしまいかと案じたが、今のところ、無断で学校を休むこともなく、大した問題も起こしてはいない。(朝の歎び上 10・1)

例 その良介の言葉に、伸介は強く手を左右に振りながら、
「そんなこと、いいんだ。(略)」(朝の歎び上 197・14)

例 その御主人の言葉で、ご婦人はまた小さく首を傾げられたが、仄かに微笑んで、

「さあ、おとなしくしているかしら」
と仰言ってから、(略)(月光の東 116・10)

表4 現代形容詞修飾の分布(宮本輝作品)

連体	ドナウの旅人	朝の歌び	錦繡	蜩川	月光の東	泥の河	道頓堀川	夢見通りの人々	合計5	率7(%)		
文字数	678222	517174	188190	57728	338742	53792	163795	188190	2185833			
大きい	7	3	1	5	4	0	1	1	22	9		
小さい	6	12	5	3	4	0	2	4	36	14		
大きな	104	59	37	12	37	15	39	24	327	128		
小さな	95	97	35	7	32	23	33	22	344	134		
長い	75	48	44	7	22	6	32	21	255	100		
短い	6	2	2	4	5	2	3	3	27	11		
深い	27	10	13	6	17	2	1	7	83	32		
浅い	2	0	0	0	0	0	0	0	2	1		
遠い	8	4	5	4	2	2	11	3	39	15		
近い	36	15	4	2	16	0	5	1	79	31		
重い	7	12	2	0	1	1	2	0	25	10		
軽い	5	1	2	1	2	0	0	1	12	5		
古い	21	9	3	4	22	0	1	1	61	24		
新しい	31	23	10	3	15	2	20	7	111	43		
強い	29	15	16	2	10	0	5	6	83	32		
弱い	6	6	0	0	2	0	0	3	17	7		
多い	10	1	3	0	2	0	3	1	20	8		
少ない	7	3	1	0	3	0	2	1	17	7		
若い	88	45	8	3	44	3	33	9	233	91		
幼い	7	4	4	1	4	0	0	0	20	8		
嬉しい	0	1	2	1	1	0	0	0	5	2		
高い	23	15	3	3	12	2	2	7	67	26		
合計	600	385	200	68	257	58	195	122	1885	737		
連用	ドナウの旅人	朝の歌び	錦繡	蜩川	月光の東	泥の河	道頓堀川	夢見通りの人々	合計6	率8(%)	全体合計	全体率(%)
大きい	47	25	9	13	7	8	11	16	136	53	158	63
小さい	28	14	8	1	8	3	15	9	86	34	122	49
長い	8	7	7	3	10	1	7	0	43	17	298	119
短い	7	2	0	1	0	0	2	0	12	5	39	16
深い	15	11	6	2	4	0	3	3	44	17	127	51
浅い	1	1	1	1	0	0	0	0	4	2	6	2
遠い	9	8	2	1	4	0	0	1	25	10	64	26
近い	19	4	7	4	2	1	0	2	39	15	118	47
重い	3	2	0	3	6	0	1	0	15	6	40	16
軽い	32	15	6	0	3	0	7	7	70	27	82	33
古い	2	0	0	1	2	0	0	0	5	2	66	26
新しい	1	0	2	1	3	0	1	1	9	4	120	48
強い	37	14	6	3	16	3	14	8	101	39	184	74
弱い	3	3	0	0	2	0	1	0	9	4	26	10
多い	2	7	2	0	7	1	0	0	19	7	39	16
少ない	3	1	2	0	3	0	5	0	14	5	31	12
若い	8	1	0	0	3	0	0	0	12	5	245	98
幼い	0	1	1	0	0	0	0	0	2	1	22	9
嬉しい	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6	2
高い	10	5	5	2	1	1	2	2	28	11	95	38
合計	236	121	64	36	81	18	69	49	674	263	2559	1024

(二) 現代形容詞修飾と中古中世形容詞修飾

ここでは修飾における変化の動向を把握するため、中古中世と現代を対照する。前述してきた『源氏物語』、『平家物語』および現代小説について比較するため表 5²²を見られたい。表 5 の縦軸には各時代の資料を、横軸には連体修飾成分総数と連用修飾成分総数、及びそれらを合計した総数を配置し、各総数に対する割合を連体修飾成分・連用修飾成分でそれぞれ算出したものが率 9 と 10 である。また、文字数という欄は、資料毎の文字数を示し、各資料における 10,000 字あたりの修飾使用率を割合として表 5 修飾機能の史的変遷（中古中世から現代）

²² 赤川次郎（1988）『失われた少女』角川文庫については、ほかの小説やエッセイに比べ、会話文が多く、10 頁平均で割り出したところ、1 頁あたりの文字数が約 331 文字となった。そのため、行数×縦文字数ではなく、1 頁あたりの平均文字数 331 文字を基準に算出した。

	連体総数	率9 (‰)	連用総数	率10 (‰)	総計	文字数	割合
源氏物語	891	476	981	527	1977	1049043	18.8
平家物語	130	317	280	683	410	810492	5.1
現代1 (宮本輝)	1885	737	674	263	2559	1997643	12.8
現代2 (赤川次郎)	93	679	44	321	137	114195	12.0
現代3 (池波正太郎)	160	851	28	149	188	127908	14.7
合計	3159	1000	2007	1000	5166	4099281	12.6

算出した。

まず注目されるのは、連体修飾成分と連用修飾成分の使用率において、時代毎に大きな差があることである。中古の『源氏物語』では連体修飾成分 476‰ と連用修飾成分 527‰ で拮抗しており、『平家物語』では 317‰ 対 683‰ で連用修飾成分の使用が多い。さらにそれらと現代小説を対照させると、現代1 (宮本輝作品) においては、737‰ 対 263‰ で連体修飾成分のほうが多く使用されており、変化が見られた。

また興味深いのは、現代語における連体修飾成分と連用修飾成分の使用率である。宮本輝作品においては 737‰ 対 263‰ と連体修飾成分のほうが多く使用される。ここにきて、この現代作品の数字が、宮本輝独自の文体的特徴である疑問が払拭できないため、参考までに赤川次郎作品²³と池波正太郎作品²⁴との2作品を追加した。すると結果として連体修飾成分と連用修飾成分の使用率はそれぞれ 679‰ 対 321‰ と 851‰ 対 149‰²⁵になり、宮本輝作品の数字を支持するものとなった。つまり中古、中世では連体修飾成分と連用修飾成分が拮抗、または連用修飾成分を多く使用していたが、現代語では連用修飾成分は減少し、むしろ連体修飾成分が多くなっているということになる。

また、10,000 字あたりの成分使用率であるが、まず『源氏物語』では 18.8 である。この数字は分かりやすく言えば、10,000 字あたりに前述の語彙が約

²³ 赤川次郎 (1988) 『失われた少女』 角川文庫

²⁴ 池波正太郎 (1984) 『男の作法』 新潮文庫

²⁵ 池波正太郎 『男の作法』 は時代小説ではなく、エッセイである。他の二作家に比べ、比率差が大きいのが、ジャンルか作家の文体の違いによるものかと予想される。ただ、そういう違いなどについては今後資料を増やして詳細に調査する必要があるが、ここでは現代日本語資料のどれもが連体成分と連用成分の比率において連用修飾成分が減少していることに焦点を当てて考えたい。

19 個の割合で修飾成分に使用されるということになる。『平家物語』では 5.1 と極端に少なく、10,000 字あたり 5 個しか見られないことになる。更に宮本輝作品では 12.8、赤川次郎作品では 12.0、池波正太郎作品では 14.7 となり、現代語では 10,000 字あたり大体 12 から 15 個ほど使用される計算となる。個別的にみると（下記表 1・2・4 抜粋）、現代作品の語彙 15 語で連体修飾成分が多くなっており、5 語で連用修飾成分が多くなっている。

中古中世と現代作品を対照させると、もともと連体修飾成分が多かったものでも連用修飾成分が多くなっている。この動向は特徴的である。中古では連体修飾成分と連用修飾成分の割合が拮抗しており、さらに 10,000 字あたりに使用される延べ修飾成分は三時代で最も多いことから、中古の『源氏物語』では修飾成分の多い文体だったと言えよう。中世の『平家物語』では連用修飾成分が多くなるが、10,000 字あたりの修飾成分が少ないことから、修飾成分が他の時代に比べ少ない文体であり、漢文系文体の混入による影響が想起される。さらに現代小説では連用修飾成分となる語が少なくなっていた。ほとんどの語において連体修飾成分が増加し、修飾成分において連体修飾を中心とした文体に変化していると推測される。

中古から中世で連体修飾成分・連用修飾成分それぞれの増減の変化が見られたのは「高し」「大きなり」「小さし」「長し」「少なし」「新し」の 6 語で、その他の語は元々どちらが多い。その中でも元々連用修飾成分が多かった「近し」「遠し」「重し」「弱し」「多し」「うれし」「深し」は現代語ではすべて連体修飾成分が多い。

表 1・2・4 抜粋

『源氏物語』			『平家物語』			現代				
	連体	連用		連体	連用		連体	連用		
中古に連体修飾成分が多く、中世に連用修飾成分の割合が多くなるもの	高し	62	33	高し	12	16	連体修飾成分が多い語	長い	255	43
	大きなり(大し)	28	0	大きなり(大し)	17	67		若い	233	12
	小さし	33	12	小さし	0	5		新しい	111	9
	長し	45	30	長し	12	13		深い	83	44
	少なし	12	10	少なし	0	7		近い	79	39
中古から連用修飾成分が多く中世でも多いもの	近し	133	220	近し	10	42	高い	67	28	
	遠し	26	37	遠し	8	11	古い	61	5	
	重し	26	34	重し	7	12	遠い	39	25	
	強し	11	34	強し	2	13	短い	27	12	
	弱し	11	19	弱し	1	6	重い	25	15	
	多し	0	149	多し	2	43	多い	20	19	
	うれし	50	75	うれし	5	7	幼い	20	2	
	深し	203	234	深し	16	24	弱い	17	9	
中古中世ともに連体修飾成分が多いもの	古し	32	1	古し	19	1	少ない	17	14	
	わかし	160	47	わかし	9	2	嬉しい	5	1	
拮抗しているもの	短し	5	6	短し	1	1	連用修飾成分が多い語	大きい	22	136
	浅し	6	7	浅し	6	6		強い	83	101
	かろし	5	4	かろし	0	1		小さい	36	86
中古で連用修飾成分多く中世で拮抗	新し	15	23	新し	3	3	連体詞	軽い	12	70
								浅い	2	4
判定できない	おさなし	28	6	おさなし	0	0	小さな*	344		
							大きな*	327		

例 タイに流れ出た難民はカンボジアとの国境に近い森林の中に集められていた。(ドナウの旅人上 20・14)

例 どの町の広場にたたずんでも、彼女は遠い遠い昔に、この広場で立っていたことがあるという奇妙な幻想にひたるのである。(ドナウの旅人上 137・15)

例 「(略) きっと何か私にとって深い意味を持った出来事の始まりなんだって言い聞かせたの。(略)」(ドナウの旅人上 344・7)

一方、現代語で連用修飾成分が多い語は「強い」「軽い」「浅い」「大きい」「小さい」である。中古中世をみると「強い」(強し)は中古中世ともに連用修飾成分が多い語である。また「軽い」(かろし)と「浅い」(浅し)は中古中世で拮抗している語として示したが、いずれも中古中世での使用頻度は高くない。

また、「大きい」「小さい」が現代語で連用修飾成分として多く使用されるのは、連体詞「大きな」「小さな」が存在するからだといえる。つまり「大きい」「小さい」が連体修飾成分となるかわりに、「大きな」「小さな」が固

定化した連体詞として使用されるので、当然のことながら連体修飾成分になりづらい。そのかわり「大きい」と「小さい」は連用修飾成分となり、「大きく」「小さく」で担当するという役割が課せられているといえる。現代語の様相は中古の『源氏物語』でみられた「大きなり（大し）」と「多し」の役割分担の一端を修飾形態の固定化というかたちで今も担い続けていることを窺わせる。すなわち中古の『源氏物語』で連体修飾成分を多く担当し、「大きい」を意味していた「大きなり（大し）」が、現代語の連体詞「大きな」で固定的に連体修飾を担っているのではないか。しかしその一方、「大きなり（大し）」は中世の『平家物語』で連用修飾成分が増え、連用成分を多く担当していた様相も見られた。中世末期には「大（おほ）きい」という形容詞が登場することになるのだが、中古から受け継がれ中世の連用修飾を多く担当した「大きなり（大し）」が、「大きい」を意味する新しい語「大きい」とどのような関係を保ち、派生していったのかはより詳細な考察が必須なので紙幅の関係で別稿に期したいが、現代日本語で連用修飾成分を多く担当している「大」系統は、所謂中世『平家物語』で連用成分が多くみられた「大きなり（大し）」と中世末期に登場する「大きい」を基としているように思われる。

中古、中世と現代を比較してきたが、全体的には中古の『源氏物語』と中世の『平家物語』で様々な様相を示した修飾成分が、現代小説においては連用修飾成分が減少しているという変化が見られた。

六・まとめと課題

修飾成分の機能における動向を中古・中世と現代で対照させて述べた。以上のことから以下の事項が明らかとなった。

- ①『源氏物語』では連体修飾成分がやや多いものの、連体修飾成分と連用修飾成分となる割合が拮抗している。修飾成分は 10,000 字中約 19 回の割合で見られる。
- ②中世の『平家物語』では連体修飾成分の割合が減少し、連用修飾成分の割合が増加している。10,000 字あたり約 5 回の割合で修飾成分が現れ、

三時代中最も修飾成分の使用率が少ない。

- ③現代小説では20語のうち15語が連体修飾成分として使用する回数が多く、中古中世で連用修飾成分として多く使っていた語彙も現代になると連体修飾成分として使用する率が高い。修飾成分は10,000字あたり12～15回の割合で見られる。

本稿で実証的に検証した結果、中古、中世、現代の各作品においてこのような現象がみられた。このような修飾構造の動向を明らかにする実証的な考察は皆無に等しく、そういった意味では本稿の古代と現代を対照させるという目的は達せられたと思われる。しかしながら本稿は予備調査的な意味合いが強いので様々な課題が山積している。

個別的な語の現象は紙幅上、詳細には踏み込めなかった。例えばどのような修飾先のものが変化したのか語別に考察することや、現代小説で「強い」になぜ連用修飾成分が多いのか、なぜ使用頻度が高いものに現代語で連体修飾成分が増える傾向があるのか等があげられる。また、中古から現代まで、連体修飾、連用修飾の主体がどう変わっているのか、総体的に見てゆくと、構文論的にも寄与できるであろう。また、中古から中世までしか調査できなかったため、そういった意味では中世から現代に至る作品群を調査する必要もあろう。これらは稿を別にして詳細に検討、記述しなければならない課題である。特に修飾成分だけでなく、修飾される被修飾語を検討することは、現代日本語がどのような修飾構造を持つのかだけでなく、動詞述語文の発達過程を明らかにし、現代日本語の動詞述語文や文の事象構造を明らかにすることに繋がるはずである。後稿に記したい。

参考文献

- 北原保雄著（1981）『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 細川英夫（1989）「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』158
- 重見 一行（1990）「中古形容詞連用修飾の変相」『語文』（通号 55）
- 奥津敬一郎（1996a）「連体即連用—自然現象文—」『日本語学』15 巻 5 号
- 奥津敬一郎（1996b）「連体即連用—変化動詞文—」『日本語学』15 巻 11 号
- 小林 立（1997）「中国語における連体修飾語と連用修飾語」『香川大学経済論叢』69 巻 4 号
- 岩崎卓（1998）「連体修飾節のテンスについて」『日本語科学』（通号 3）
- 鍵本有理（1999）「万葉集における連体修飾—現代語との比較を通して」『国文学』（通号 78）
- 高烈夫（1999）「日本語の「連用修飾語」について—日本語と中国語・英語などの比較研究」『阪南論集. 人文・自然科学編』34 巻 3 号
- 坪井美樹（1999）「《大》と《多》：平安和文における〈オホカリ〉の使用について」『文藝言語研究. 言語篇』35 巻
- 山内洋一郎（1999）「「おほ」（大・多）の変遷—「大なり」「多し」「多かり」「大きい」をつないで」『国語語彙史の研究』18 巻
- 呉ケン定（2000）「連体修飾句の語順—動詞を中心に」『計量国語学』22 巻 5 号
- 北村雅則（2001）「モノダで終わる文—連体修飾部の時間的限定性からの考察」『名古屋大学国語国文学』（通号 88）
- 松木 正恵（2002）「連体修飾節—構造的把握と意味的把握」『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』51 巻
- 村田菜穂子（2002）「古代語形容詞の造語形式—中古散文の形容詞を中心に」『帝塚山学院大学日本文学研究』33 号
- 吉田光浩（2003）「感情語の語誌—形容詞モノシを例として」『国文学 解釈と教材の研究』48 巻 4 号（通号 695）
- 安藤まや・関根聡（2005）「新聞記事コーパスに基づいた上位語・下位語を含む連体修飾表現の分析」『計量国語学』24 巻 8 号
- 井本亮（2005）「連用修飾と動詞—修飾の基本原則と関係構成の多様性から動詞句の意味を探るアプローチ—」『国文学』50 巻・5 号
- 林浩恵（2006）「上代形容詞の連体修飾用法」『語文』（通号 87）

【付記】

本稿は行政院國科科學委員會研究助成金（NSC96—2411—H—327—007）による研究成果の一部をまとめたものである。ここに記して感謝申し上げたい。